

AAR News



©Yoshifumi Kawabata

特集 子どもたちの未来を拓く



AAR ニュース 2022 春号

- p2-6 特集：子どもたちの未来を拓く / 駐在員だより：パキスタン
- p7 活動レポート：ウクライナ緊急支援
- p8-9 特別インタビュー：浜内千波さん（料理研究家）
- p10-12 インフォメーション

写真右上から時計回りに：日本（福島）、カンボジア、トルコ、日本（福島）、ウガンダ、ウガンダ、パキスタン

子どもたちの未来を拓く



AARが提供した歩行器で学校に通うピア君。左はカンボジア駐在員の向井郷美

世界では今、多くの子どもたちが紛争や政情不安、貧困、障がいなどさまざまな困難に直面しています。次の時代を担う子どもたちへの支援は、AARの大切な取り組みのひとつです。AARの子どもたちへの支援活動をご紹介します。

カンボジア

障がい児と一緒に学ぶ学校づくり

AARが2013年から障がい児支援事業を実施しているカンボジアのカンダール州に住むピア君は、肢体障がいがある10歳の男の子です。ピア君の父親は、ずっと前に亡くなってしまい、今は母親と2人の弟、祖父母と一緒に暮らしています。母親は一家の家計を支えるために首都プノンペンに出稼ぎに行っており、月に数回帰ってくるだけです。



幼稚園に就学した頃。学校の同級生と一緒に

私たちが取り組んでいるのは、障がいの有無にかかわらず、子どもたちが一緒に学ぶ「インクルーシブ教育」の推進です。障がい児が地域の学校に通えるように、州内の小学校15校を対象にバリアフリートイレの新設・改修、スロープや舗装道路の設置のほか、地域ぐるみで理解を深めるための教員研修、児童・生徒や地域住民への啓発活動を行っています。

ピア君の家からバイクで約5分の小学校でも、AARは2016～17年に学校の環境整備を実施しました。ピア君は当時まだ小学校就学前で、併設された幼稚園に入りました。祖母が毎日、自転車で送り迎えしてくれて、AARが提供した歩行器を上手に使いながら、勉強したり友だちと遊んだりしていました。今では学校でできた新

しい友だちが家に遊びに来るようにもなりました。

おばあさんはピア君が将来、自立して生きていくために知識や技術を身につけてほしいと強く願っています。「学校に通い始めて文字を書けるようになったし、テストの成績も良くてね。家で弟たちの面倒を見たり、自分で洗い物をするようになったり、成長を感じました」と嬉しそうに話していました。

コロナ禍を乗り越えて

ところが、2020年からカンボジアでも新型コロナウイルス感染が拡大し、学校は休校になってしまいました。感染状況を見ながら再開・休校が繰り返される状況が約2年間続き、2022年1月ようやく新学期年度が始まりましたが、1月下旬に訪問すると、ピア君は通学を再開できていなかったのです。

おばあさんに尋ねると、さまざまな事情があることが分かりました。送り迎えをしていたおばあさんが腕を痛めて自転車に乗れなくなったこと。景気悪化でお母さんの収入が減ってしまい、ピア君が外出時に着用するおむつ（一つ20～30円）の代金が家計の大きな負

担となっていること。また、授業再開にあたって同国教育省はワクチン接種を強く推奨していますが、健康状態に不安があるピア君は副反応への懸念から接種を受けていないこと――。

これまでも家庭環境や経済状態の変化が原因で、両親が子どもを通学させるのが難しくなった例を何度も見てきました。しかし、コロナ禍の影響はより深刻で、多くの家庭が失業や減収に苦しんでいます。社会福祉制度が整っていないカンボジアでは、障がい児にかかる費用を家族がすべて負担するしかありません。障がい児にとって、

学校に通えなくなるリスクが常にあるということに改めて実感するとともに、さまざまな障壁があるからこそ、問題の解決には地域住民の協力が不可欠だと思いました。

その後、私たちは地元の障がい者支援委員会のメンバーと一緒にピア君の家を再訪しました。同委員会は、AARが設立した地域住民グループを中心として、郡知事の正式な承認を得て村ごとに置かれた組織です。AARは同委員会に対し、障がい児のニーズ調査やデータ管理の方法、療育、通学手段の改善などの研修を実施してきました。

委員会メンバーが改めて事情を聞き、おばあさんと話し合ったところ、メンバーのひとりでもある小学校の校長から「ワクチン接種を推奨するが、健康上の理由で接種できないのであれば登校を拒むことはない」と発言がありました。ピア君は無口な男の子ですが、「学校に行きたい?」と聞かれて、嬉しそうに「行きたい」と答えました。おばあさんも安心したようで、再び通学させることを約束してくれました。その2週間後、痛めていた腕が回復したおばあさんに送迎され、教室で同級生と並んで勉強するピア君の姿がありました。おむつ代は、祖父母の仕事の収入や村からの支援金でやりくりしているそうです。

私たちにできることは何か

ピア君のような障がい児が安心して通学するためには、学校の受け入れ体制を整えるだけでなく、家族が教育の大切さを理解し、経済的にも学校に送り出せる状態にあることが欠かせません。そのためには、地域全体で障がい児とその家庭を支える環境を整えていくことが必要です。それぞれの地域に設立された障がい者支援委員会がしっかりと予算を確保し、支援



家で2人の弟と遊ぶピア君

が必要な子どもに個々の事情に合わせて適切な対応をしたり、近所の人々も教育の重要性を理解してサポートしたり、地域の資源や人材を活用して可能性を広げなければなりません。

日本で学校教育を受け、公立中学校で教員を勤めた経験もある私にとって、子どもが学校に通うのは当たり前のことでした。しかし、カンボジアでは、それが当たり前ではない現実は何度も直面してきました。そんな時、私たちのような海外の NGO にできることは本当にわずかです。それでも、AAR に何ができるのかを考えながら、日々の活動に取り組んでいきたい。ピア君の明るい表情を見て、そう思いました。



障がい者支援委員会との協議後、就学を再開したピア君



チャングワリ難民居住地の家屋

学校生活でも大きな悩みがあります。ウガンダでは次の学年に進級する際、試験で一定の成績をとる必要がありますが、レイチェルさんは「試験は英語で行われるので、そもそも問題がよく理解できなくて困ります」と話します。進級できずに留年を繰り返していると、子どもたち自身が学習意欲を失ったり、家族が経済的に通学を支えきれなくなったりして退学する事態に陥ってしまいます。

そうした課題を解決するために、私たち AAR は現在、難民居



障がい者支援委員会メンバーがピア君の家を訪問。右から2人目が校長先生



ブノンペン事務所
向井 郷美

日本の中学校や中国の高校で教師として勤務し、大学院で国際協力について学んだ後 AAR に入職。青森県出身

ウガンダ

難民の子どもたちの学習を応援

アフリカ東部の内陸国ウガンダで、AAR は 2016 年以降、周辺国から流入した難民の子どもたち、および地元の子どもたちの教育支援

住地内の 9 校を対象に、英語の補講プログラムを実施しています。レイチェルさんも友だちと一緒に放課後の補講に参加しており、「ここで勉強することで英語の読み書きが少しずつできるようになってきました」と、自分の名前を書いたノートを少し照れながら見せてくれました。

難民居住地の教育現場では、教室や教科書・学用品が不足し、教員の数も足りていないなど非常に多くの課題があります。加えて同じウガンダ国内でも、南スーダン難民とコンゴ難民では異なる問題に直面していることが分かります。英語に一生懸命取り組むレイチェルさんの姿を見ながら、異国で暮らす難民の子どもたちが他の子どもたちと同じように、学びをあきらめなくてよい教育環境づくりを続けていきたいと改めて感じています。



ホイマ事務所
家高 真衣

途上国支援に携わる開発コンサルティング会社に就職後、支援活動に直接携わりたくて AAR に入職。和歌山県出身

日本 福島の子どもたちをもっと笑顔にしたい：東日本大震災から 11 年

「細く切るのが難しかったけど、自分で打ったそばはおいしい!」「貝の化石をいっぱい見つけられたよ」。AAR が 2021 年 12 月 4～5 日、福島県西会津町で開催した体験型イベント「西会津ワクワク子ども塾」に 38 人の子どもと保護者が参加し、そば打ちや化石発掘体験、防災ワークショップ、シャボン玉遊びなどを楽しみました。

子ども塾は 2011 年の東日本大震災に伴って起きた原発事故による放射線の影響で、屋外で遊ぶ機会が制限された福島の子どもたちに、放射線量の低い地域でのびのび過ごしてもらおうと、震災翌年の 2012 年に始めました。10 年を経た現在は、地域交流や震災の風化を防ぐことを目的として継続し、これまでに計 31 回開催、のべ 920 人の親子が参加しています。

参加した保護者からは「新型コロナウイルス感染でなかなか遠出できない状況です。久しぶりに家族と出かけられました」「子どもだけのイベントはあっても、親子で参加できるものはあまりないので、良い思い出になりました」との声が寄せられました。

※AAR は手指の消毒やマスク着用の徹底、PCR 検査などコロナ対策を講じたうえでイベントを実施しています。感染状況によっては開催中止・延期の措置をとっています。



会津産の粉を使ってそばを打つ子どもたち



初対面の子ども同士もすぐに仲良くなり、思いきり外遊びを楽しみました



レイチェルさんとウガンダ駐在員の家高真衣

レイチェルさんが話してくれたのは「言葉の問題」です。私もこの居住地に来て気づいたのは、南スーダンとウガンダの公用語は同じ英語ですが、ベルギー植民地だったコンゴは仏語なので、コンゴ難民の子どもたちはより不自由な思いをしているということでした。

例えば、レイチェルさんの体調が悪くなって近隣の病院に行った時、ウガンダ人の医師に病状を詳しく説明することができず、身振りを交えて「痛い」と伝えるのがやっとでした。近所にあるウガンダ人の店で日頃ちよっとした買い物をする時でさえ、コミュニケーションに苦労するといえます。



教室で授業を受ける子どもたち

ミャンマー

困難な状況でも
障がい児支援を継続

ミャンマーの最大都市ヤンゴンに暮らすピョーちゃん（4歳・仮名）は、脳性まひのため筋肉が萎縮し、自分で立ったり座ったりすることができません。食事や着替えなど日常生活はすべて家族の介助が必要ですが、生後すぐに父親が亡くなり、今は母親ときょうだいとともに親せきの家で暮らしています。

親せき宅は小さなオートバイ工場を経営していましたが、新型コロナウイルス対策のロックダウンの影響を受けて、工場の閉鎖を余儀なくされました。さらに昨年2月のクーデター後、一家は身に覚えのない嫌疑をかけられ、2カ月間安全な地域に避難して暮らさなければならなりません。

AARは現地NGOが運営する障がい児支援施設とともに、ピョーちゃんのような障がいのある子どもへの支援に取り組んでいます。以前から学費の提供やリハビリ指導を行っていま

たが、クーデター後は食料や衛生用品の配付などの支援が加わりました。母親は「日本の皆さんの支援で食料を届けていただき、心から感謝しています」と話します。

コロナ禍が続く中でクーデターが発生し、障がい児と暮らす家族にとっては、追い打ちをかけるような厳しい状況が続いています。それでも、ピョーちゃんの家族はAARの理学療法士から習ったリハビリ体操を自宅で施すなど、力を合わせてピョーちゃんの成長を支えています。AARは今後もこの国の障がい児と家族をサポートしていきます。



AARが障がい児の家庭に配付した食料などの支援物資

駐在員だより

イスラマバードの名物書店@パキスタン

パキスタンの首都イスラマバードには、全国から本好きが集まる名物書店「サイード・ブック・バンク」があります。書籍数、面積、知名度、歴史、いずれもパキスタンで一番といわれています。3階建ての広い店内には、専門書や雑誌、図鑑や辞典、児童書など約20万冊がぎっしり。「ブックバンク（本の銀行）だから、あらゆるジャンルの本を揃えています。品揃えは南アジアでも一番ですよ」と、社長のアフマド・サイードさん。「日本出身の作家だと、村上春樹やカズオ・イシグロが人気ですね。私も『海辺のカフカ』を読みました。とても面白くて3日で読み終えてしまいましたよ」。



村上春樹の小説も人気。書棚2段分を独占していました

サイード書店はアフマドさんの父親のジャンさんが創業しました。ジャンさんは書籍商の下で修業し、1952年にパキスタン北西部のペシャワールで開業。アフガニスタン紛争の重要拠点として、米国の外交官や援助関係者などが多く住んでおり、そうした客層をターゲットにして事業を拡大したそうです。1990年代に入るとテロ活動が活発になり、さまざまな宗教や思想の本を扱っていたサイード書店も危険にさらされ、1999年に治安が安定したイスラマバードに店舗を移しました。各国大使館や国際機関が集まっているため、現在もお客さんの約半分は外国人だそうです。



AARの大泉（左）とサイード社長

ホームページでは、サイード社長おすすめの本や、ベストセラーを紹介しています。ぜひご覧ください！

AAR イスラマバード事務所 大泉泰

ウクライナ西部リヴィウで国境行きのバスを待つ人々(3月10日)



緊急支援

ウクライナ危機への人道支援を開始 ウクライナ国内避難民・モルドバへ逃れた難民を支援



東欧のウクライナで深刻な人道危機が続いています。隣国ロシアは2月24日、ウクライナに軍事侵攻し、300万人を超える難民がポーランドなど周辺国に逃れる一方、国内で避難する国内避難民も1千万人に上ると推計されています(3月16現在)。

AARはポーランドのカトリック教会の修道女会を通じて、避難民が身を寄せるウクライナ西部テルノピリ州の修道院への支援を開始しています。3月上旬に東京事務局職員をポーランドに派遣しました。併せて、同じくウクラ

イナの隣国モルドバにも緊急支援チームを送っています。

テルノピリ州の修道院には爆撃を受けた地域から約70人の女性や子どもが身を寄せるほか、ポーランド国境を目指す人々が臨泊する中継地にもなっています。「食料の備えが1週間分しかなく、薬もありません」とのSOSを受け、

ポーランドから陸路で食料や医薬品、衛生用品、子ども用の衣類などの支援物資を修道院に移送。必要に応じて近隣の町に滞在する国内避難民にも分配されています。ヨーロッパ最貧国ともいわれるモルドバには35万人が流入し、そ

の半数以上はさらにルーマニアなどのEU諸国に逃れたものの、約10万人が留まっています。経済規模が大きいポーランドなどの他の避難国と比べて、難民受け入れ体制が十分に整っているわけではありません。AARは他の援助機関と協働し、逃れてきた人々が一時的に滞在する施設で温かい食事を提供する支援の準備を進めているほか、必要とされる支援物資の調査を行っています。

すでに多数の個人や企業・団体の皆さまからウクライナ緊急募金にご寄付が寄せられています。皆さまの温かいお気持ちに感謝するとともに、引き続き、AARの人道支援活動へのご協力をお願い申し上げます。



ウクライナ西部テルノピリ州の修道院で支援物資を受け取った国内避難民の少女(「汚れなき聖母マリアの修道女会」提供、3月14日)

「ウクライナ危機に関心を寄せ、支援を寄せてくださることに感謝」

国立ドニプロ大学の日本語教師
タイシャ・ベリャニナさん

軍事侵攻が始まって10日ほど東部の街・ドニプロに留まっていますが、攻撃が迫ってきて恐ろしくなり、母とポーランドへの避難を決めました。



リュックひとつに着替えとクラッカーなどを詰めて、ドニプロ駅で列車を6時間待ち、17時間かけてウクライナ西部のリヴィウに到着。市内の学校に設けられた一時滞在施設でボランティアから温かい食事をもらい、教室の床に敷かれたマットで一晩仮眠しました。

翌朝、国境に向かうバスに乗り、両国の検問所を通過するまで車内で15時間も待たされましたが、なんとか国境を越えました。現在、ワルシャワ市内の友人宅に身を寄せています。

今回の軍事侵攻はウクライナの人々も全く予測しておらず、本当にショックでした。日本の皆さまがウクライナのことを心配し、支援を寄せてくださっていることを大変心強く感じています。

心を込めた料理は人を幸せにします

料理研究家

浜内 千波さん

被災地支援で出会った笑顔

料理研究家の浜内千波さんは、料理教室を40年余り主宰するとともに、多くのテレビ番組や著書を通じて料理の楽しさ、食の大切さを伝えていきます。グルメ情報がある一方、食材の安全性や食品ロスへの関心も高まる今日、「食」との向き合い方はひとつの社会的テーマでもあります。東日本大震災（2011年）の被災者支援の一環として、障がい福祉事業所が販売する弁当作りを指導した経験を持つ浜内さんに、料理に込める想い、社会に広げたいメッセージを語っていただきました。

（聞き手・AAR東京事務局中坪央暁）

— 東日本大震災から11年。AARは現在も長期的な支援活動が続けていますが、浜内さんには2014年、岩手・宮城・福島3県の障がい福祉事業所が製造・販売する弁当のメニュー開発、調理指導にご協力いただきました。

何年も経ちましたが、あの時のことは今も鮮明に覚えています。障がいのある方々が働く大切な場所である福祉作業所が被災し、再建のために皆さん頑張っておられると伺って、ぜひ応援したいと思いました。

お弁当やカフェメニューの開発では、栄養バランスや彩りはもちろん、地元産の食材を使って郷土色を出すことを心掛けました。塩分や油の量にも気を配りながら、施設職員の皆さんと相談を重ねて健康的なレシピを作りました。



東日本大震災で被災した福島県郡山市の「カフェスイートほっと」で調理指導する浜内さん（2014年6月）

障がい者の方に料理を教えたのは初めての経験でしたが、私自身、心を真っ白にして寄り添う気持ちになれたのは楽しかったですし、皆さんも心を開いて、あるがままに笑顔で接してくれたこと、野菜や果物の美しさに心躍らせる様子が感じられたことがとても印象に残りました。

あの時一緒に考えたメニューを今も作り続けてくれていると伺って、うれしい気持ちでいっぱいです。

38キロ減量に成功した方法とは

— 40年余りのキャリアをお持ちですが、料理の道に進んだきっかけや転職となった出来事をお聞かせください。

徳島生まれの5人兄弟姉妹の末っ子だった私は、いつも母が台所に立つ姿を見て育ちましたが、最初から料理の道を目指したわけではありません。大阪の短期大学に進んで栄養学を学んだものの、卒業後は証券会社勤務しました。

3年間かなり懸命に働きましたが、女性はどうにも頑張っても昇進できない時代で、空しさも感じ始めた頃、ふと手にした女性週刊誌でおいしいような料理の写真を見たんですよ。

それが欧風料理を日本の家庭に広めた先駆者、岡松喜与子先生（故人）との出会いです。すぐにアシスタントに応募して上京し、住み込みで修業を始めたのですが、東京での孤独感と日々のストレスを抱えつつ、おいしい食事や珍しい食材を目の前にした生活で、身長173センチの私がいつの間にか体重96キロまで太ってしまっただけです。こうなると体調が悪化して疲れやすくなるし、精神的にも良くないし、ダイエットしなければときっぱり決断しました。

そこで、①食事は腹7分目にする、

②大好物を10個(唐揚げ、ケーキなど)書き出して上から順に食べないようにする、③こまめに体を動かす、④炭水化物を減らすという方法を徹底しました。1カ月に2キロずつ減って、何と1年半で38キロ減量することができたんですよ。食生活が健康にとつてどれほど重要か身をもって知ったことで、その後は日々の食事にとても気を配るようになりました。

料理は「サイエンス&アート」

—浜内さんのイメージというと、テレビ番組の料理コーナーですが、他にもさまざまなお仕事をしてきたそうですね。

お世話になった岡松先生の下を卒業して、1980年に中野坂上(東京都中野区)に料理教室を開いた時、自分の人生が本当にスタートしたように感じました。でも、教室だけに納まっていたわけではなく、ホテルのレストランの裏方業務を請け負っ



料理教室で調理指導する浜内さん
(ファミリーッキングスクール提供)

たり、料理や食材のテレビCMのコーディネートをしたり、30〜40代は料理に関わる多くのビジネスに携わりました。

50歳の節目に現在の東中野に教室とラボを移し、改めて自分が何のために仕事をしているのか、落ち着いて考えるようになりました。現在も食品製造やケータリング関係の企業のコンサルティング業務として、冷凍食品や調味料の開発、デパ地下のお惣菜作りから病院の食事まで手掛けていますが、そこでも私が一貫して大切にしたいのは、非日常の「おもてなし料理」「お出かけ料理」ではなく、日々の食事です。

私は料理を「サイエンス&アート」と定義しています。サイエンス＝科学とは、食材が持つ栄養素と調理の温度や組み合わせのこと、アート＝芸術とは、おいしく美しく作る技法のことです。栄養士と調理師は未だに別々の世界なのですが、若い時に栄養学を学び、料理の世界で生きてきた私なりの集大成として、その両方が揃ってこそ料理だと考えています。

家庭料理は生活の土台

—浜内さんにとって「日々の家庭料理」が基本とお見受けします。故郷・徳島の思い出の味は何でしょうか。

私の実家は海辺にあって、いつも新鮮な魚が手に入る恵まれた環境でした。母は家族のために毎日工夫しながら料理をしてくれましたね。郷土料理の筆頭は、醤油をまぶしたカツオの刺身と刻み海苔をご飯に乗せてお茶をかけた「カツオご飯」。シンブルな大人の味は父の好物で、今も食べるたびに父の面影が浮かびます。

家庭料理は家族の健康を守り、子どもたちの心身を養い、生活の土台となる大切なものです。大きくなつて故郷を思い出した時、子どもの頃に食べたもの、親に言われた言葉は、大切な宝物のようなものです。大人はできるだけたくさんさんの思い出を、子どもたちの宝箱に詰め込んであげなければならぬと思いますね。

本当においしいものを知る

—インターネット上にグルメ情報があふれる一方、食の安全性の問題、食品ロスの削減などへの社会的関心も高まっています。

バラエティ番組やインターネットの動画を見ていると、私たちにとって大切な料理や食事が「娯楽」として消費されているところもあるような気がします。

私は子ども時代や若い時にこそ、ちゃんとした本物の味を知ってほしいと考えています。赤ちゃんが離乳食のリンゴやニンジン初めて口にして微笑むように、私たちは素材本来のおいしさ、本当の味を知っているはず。幼い子どもにもファストフードや添加物まみれの加工食品を安易に食べさせていると、インパクトの強い味に慣れて、素材の味を知らない舌になってしまいかも知れません。

食品ロスや食べ残しの問題も、まずは日常の家庭料理に立ち返って考えてみればいいと思います。私は海辺で育ったせいかな、今でもお刺身を買うことは滅多になく、魚を丸ごと買って無駄なく使い切るようにしていますし、旬の野菜も同じことです。食材をじっくり見つめて、もったいないという気持ちで大切に料理したいと常々思っています。

「食のバトン」を未来につなぐ

—最後に改めて、料理研究家として社会に伝えたいメッセージを。

食べることは私たちのすべての基本であり、日々の料理は生活の土台になります。料理を通じて、正しい食生活を子どもたちに伝えていってほしい。私も食のバトンを未来につなぐために、料理の楽しさをもっと発信していきたいと思っています。

6/25（土）通常総会のご案内

昨年度の活動報告・決算、および今年度の事業計画・予算についてご説明する通常総会を6月25日（土）午後、開催します（会場未定）。議決権のある正会員の皆さまには、改めてご案内をお送りいたします。正会員でない方もご参加いただけますので、参加をご希望の方は東京事務局にご連絡ください。

子どもたちの未来を拓く遺贈寄付 ～パンフレットをお送りします～

実り豊かな人生のしめくくりとして、遺産の一部をNPO法人に託す「遺贈寄付」のお問い合わせが増えていきます。AARでは遺贈寄付・相続財産寄付を分かりやすく説明したパンフレットをご用意しています。お気軽にお問い合わせください。（担当：中坪／千ヶ崎）



パンフレットでは、遺贈の手続きや法律の説明などを分かりやすくご紹介しています

各種お問い合わせ・お申し込みはAARまで

TEL：03-5423-4511 E-mail：info@aarjapan.gr.jp

モノオペラ「ガラシャ」 500名を超える方々が来場

チャリティ公演モノオペラ「ガラシャ」を1月29日に開催しました。カルテットの皆さんによる演奏にあわせてソプラノ歌手の田中彩子さんが美しい歌声を、能楽師の林宗一郎さん、茂山逸平さん、谷本健吾さんが見事な謡と舞をそれぞれ披露され、500名を超える方が鑑賞されました。お客さまからは「オペラと能が違和感なく調和していて、深く引き込まれた」「田中彩子さんの華やかな歌声に感動した」などのご感想をいただきました。日本ロレックス株式会社の特別協賛により、公演の収支差額は122万205円となり、お寄せいただいたご寄付は226万4,151円となりました。ウクライナ難民支援をはじめ、国内外での活動に大切に活用させていただきます。



ガラシャを演じる田中彩子さん

※当日は東京都が定める新型コロナウイルスの感染防止策を講じて開催しました。

※3月13日、NHK BS1「ザ・ヒューマン」にて田中彩子さんの密着取材の様子と、当日の公演が放映されました。

2021年冬募金 ご協力ありがとうございました

12月にお送りした冬募金のお願いに、のべ2,220名の皆さまより2,389万6,785円のご寄付をいただきました。温かいご支援に心より御礼申し上げます。皆さまのお気持ちを国内外の活動に生かしてまいります。



エチオピア難民の女性たちに衛生用品を手渡しました

ふるさと納税を通じたご支援

AARでは佐賀県へのふるさと納税を通じたご寄付を受け付けており、2021年度はのべ305名の皆さまより862万3,200円のご寄付をお寄せいただきました（3月10日時点）。ふるさと納税によるご寄付は、AARが取り組む佐賀県での国際理解教育、海外の難民支援や国内での災害支援などに活用させていただきます。

書き損じはがき・切手キャンペーン 2万枚超が寄せられました

書き損じはがきや切手をケニアの難民居住地に暮らす若者たちの教育支援につなげるキャンペーンに、多くの方がご賛同・ご協力くださいました。期間中、目標の1万5千枚を上回る2万1,587枚のはがき・切手が寄せられました。これらのはがきを活用し、90人に通学に必要な制服や学用品をお届けします。配付は5月を予定しています。



就学・復学を希望する難民の若者に制服や学用品を届けます

イオングループからご寄付 「アジア障がい者支援募金」



公益財団法人イオンワンパーセントクラブは、アジアの障がいのある方々の教育や就労支援を目的とした「アジア障がい者支援募金」を1月11日から2月10日まで実施してくださいました。全国のイオングループの店舗や事業所（一部を除く）に募金箱を設置し、お寄せいただいた募金2,507万1,480円に同財団が同額を上乗せし、総額5,014万2,960円をAARがラオス、カンボジア、ミャンマーで取り組む障がい者支援にご寄付くださいました。同法人は20年近くAARをご支援くださっています。

野村生涯教育センターより継続したご支援

教育に関するさまざまなボランティア活動を行っている公益財団法人野村生涯教育センターより、AARの国内外での活動にとご寄付をいただきました。同法人はAAR創立当初よりご支援くださっており、今回も幼児教育部をはじめ全国の支部でメンバーの皆さまが募金をしてくださいました。

Tシャツアート展の売り上げからご寄付

美術作家や愛好家が所属する現代アーティストセンター（千葉県印西市）が、「子どもたちの未来を救う」をテーマにTシャツアート展を1月20日から26日まで東京都美術館で開催。美術作家や一般の方がデザインしたTシャツが展示され、Tシャツ157枚の売り上げをAARにご寄付くださいました。主宰の野村俊幸さまから「美術を通じて社会貢献ができれば」とのお言葉をいただきました。



会場には300枚のTシャツが展示され、多くの来場者がありました

相続財産をお寄せいただきました

S・Fさま（長野県）
能登比佐子さま（東京都）
三澤順子さま（神奈川県）

（2021年12月14日～2022年3月10日）

皆さまの思いを大切に受け止めて、難民や子どもたち、障がいのある方々のために役立ててまいります。

アフガニスタン情勢・緊急支援報告会を開催しました

会員・マンスリーサポーター、アフガニスタン緊急支援へのご寄付者の皆さまを対象に、アフガニスタンでの支援活動報告会を2月26日に開催し、AAR東京事務所でのご参加とオンライン視聴あわせて50名の方が参加しました。

AARで10年間アフガニスタン事業に携わる事務局長の古川千晶より、アフガニスタンの歴史や2001年からAARが現地で取り組む地雷対策などについて、現地で活動した際の写真やアフガニスタンの人々とのエピソードを交えながらお話ししました。AARが活動を通じてアフガニスタン女性の就労を促したり、外出の機会が少ない女性や子どもたちにも地雷の危険を伝える講座を行ったりと、現地の人々とともに取り組んできた活動を報告しました。

アフガニスタン事業を担当する東京事務局の紺野誠二からは、2021年8月の政権崩壊でアフガニスタンの人々の暮らしや教育環境がどのように変化したのかを説明。干ばつが頻繁に起こる同国では食料不足が深刻な問題であり、約320万人の子どもが急性栄養失調に陥っていると訴え、AARが昨年12月に実施した食料と毛布の緊急配付の様子を報告しました。また、タリバンはどのような集団なのか、政権交代による支援活動への影響など、活動の裏側もお伝えしました。最後に紺野は「先が見通せない状況だが、現地職員の安全を第一に、支援を必要としている人々のためにAARとしてできる限りのことを今後も続けていく」と話しました。



アフガニスタンでの支援活動について説明するAARの古川（右）と紺野（左）



「シリア難民の立場から」

ハリル・オスマン（トルコ事務所代表）

トルコ国境近くのシリアの町で生まれ育ちました。アレクサ大学で英文学と言語学を学び、故郷で英語を教えていましたが、2014年9月に武装組織イスラム国（IS）の攻撃を受けて、母と兄夫婦でトルコに逃れました。私は6人兄弟ですが、当時他の家族はすでにトルコやイラク、欧州に避難していました。トルコに来てすぐ英国の新聞社の通訳として働いた後、国際NGO「国境なき医師団」での短期の仕事を経て、2015年5月にAARトルコ事務所の正職員になりました。

AARはシリア難民の中でも、障がい者や子どもなど最も弱い立場にある人々に対して、車いすや歩行器を提供したり、医療や教育を受けられるように他の支援団体や公的サービスにつなげたりする重要な支援を実施しています。AARが運営するコミュニティセンターは、シリア人同士、あるいはシリア人とトルコ人が心を開いて交流できる場所です。難民にとっては自分の課題や経験を共有し、問題の解

決を模索する拠り所になっています。

日本で2022年2月9日に開催された公開シンポジウム「シリア難民の今」※にオンラインで登壇しました。「イスラームと信頼構築」をテーマとしたこのシンポジウムでは、AARの取り組みを報告するとともに、トルコの人々は当初シリア難民を同胞としてあたたかく迎えていましたが、10年余りを経た現在、シリア人とトルコ人がビジネスなどで競合して緊張関係が高まっている現状を説明しました。また、そうした困難な状況にあつて、AARがシリアとトルコ双方のコミュニティを結び、信頼関係を構築する役割を担っていることをお話ししました。

シリアの人々がすべてを失って避難した先で、長引く避難生活や差別によって絶望している中、私たちAARのようなNGOの支援活動は、難民に小



AARトルコ・シャンルウルファ事務所のスタッフと

さな希望を届けていると信じています。希望とは単に食料や住居を提供するだけではなく、安心して安全に暮らせると実感してもらうことです。私自身シリア難民という立場に立って、すべての人々の命と尊厳を守る人道支援活動に、引き続き力を尽くしたいと考えます。日本の皆様のご支援をお願い申し上げます。

※科研費学術変革領域研究（A）「イスラームのコネクティビティにみる信頼構築：世界の分断をのりこえる戦略知の創造」A03 班「移民・難民とコミュニティ形成」（研究代表者：黒木英充）との共催

東京事務局 浅野武治さんが逝去されました

東京事務局 浅野武治さんが2022年2月18日 虚血性心疾患により51歳で逝去されました。浅野さんは、2011年にAARの東日本大震災復興支援のためのチャリティコンサートでステージ・マネージャーを務められた後、「東北支援に積極に関わりたい」とAARに入職されました。被災された方々を元気づけたいという強い思いで、避難所でのミニコンサートや交流イベントなどの企画・運営に奔走されたほか、調理師免許を活かし、授産施設の商品開発などにも取り組みました。また、AAR主催のチャリティコンサートや国内災害被災者支援にも尽力いただきました。ユーモアにあふれた温かい人柄で、イベントや職場を盛り上げ、和ませてくれました。

故人への生前の厚誼に深く感謝するとともに、謹んでお知らせ申し上げます。



浅野武治さん（左から2人目）と、岩手県大船渡市の障がい者の通所施設「かたつむり」のみなさん（2019年2月18日）

編集部より

「ウクライナの人たちのために何かしたいが、自分たちだけでは何もできない。AARが支援を届けてくれて嬉しいです」。学校で募金活動を始めるという高校生からのメッセージ。ご支援くださる皆さまと現場をつなげる「AAR ニュース」を作りたいと思います。

AAR News

2022 Spring NO.478

次号は2022年7月上旬にお届け予定です。

特定非営利活動法人 難民を助ける会

〒141-0021 東京都品川区上大崎 2-12-2 ミズホビル7F

Tel.03-5423-4511 Fax.03-5423-4450

www.aarjapan.gr.jp



AAR Japan